

生活の
笑いの



現代に生きる江戸小咄

宇井無愁

生活の中の笑

現代に生きる江戸小咄

宇井無愁

生活の中の笑い

第二版 昭和四十七年四月二十五日発行
第四版 昭和四十九年二月二十日発行

著者 宇井 無愁

発行者 錦 茂 男

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 P H P 研究所

京都市南区西九条北ノ内町11

電話 〇五(六二) 四四三二

(郵便番号は六〇一です)

無断転載はご遠慮ください

(落丁、乱丁がありましたらお取りかえさせていただきます。)

© Mushû Ui 1972

0000-017701-7159

序

PHPの編集部が本書を企画された動機は、ほぼつぎのように説明できると思う――

現代の日本人は笑うべきことを笑わず、他愛もないことを笑っている。素直に笑える心のゆとりを失っているのではないだろうか。いったいわれわれの近い祖先は、何をどのように笑ったか、それを知りたい。そして彼らの生活から生まれた笑いを、現代のわれわれの生活のなかに生かすことはできないだろうか。その一つの目標として、江戸小咄が浮かびあがってきた。そこで編集部から私に、つぎのような操作を求めてこられた。

(1) 江戸小咄を現代の若者にも鑑賞できるよう書き改め、笑点を浮きあがらせる。

(2) それが作られた時代の背景を追及して、現代との関連性や差違を展開する。

躊躇なく私は、この企画に賛成した。興味ある企画が私の意欲をそそり、本書の意図を最終的に決定したといつてよい。

江戸小咄を私は、「江戸で作られた小咄」と解釈して、年代でいえば明和・安永・天明の小咄最盛期を中心に、内容形式ともに簡潔で洗練された秀作を選び出した。楽しい仕事であっ

た。ただ拙著「落語の原話」（角川書店版）と重複するものは割愛したので、同書をあわせ読んでもらえるとありがたい。

書き改めるといっても、時代を反映した原文のムードはなるだけこわさないよう、極端な現代語訳はさけ、原文のままのも二、三ある。それにしても四百ちかい小咄の大部分が、まだ落語化されていない事実は新鮮なおどろきであり、落語のネタはまだまだつきないという気がした。

筆の走るにまかせて、ところどころ外国小咄を引用対置した部分があるが、仕事を進めながら、これだけでも独立した一課題になり得ると気がついたのは、あとの祭りとはいえず著者の軽率、忸怩たるものがある。本書のなかでもこの部分がいちばんずさんで、要領を得ない個所になったと思う。読者の寛恕を乞いたい。

四十七年季春

著 者

生活の中の笑い
目次

大名と武士

インフレ ● あちらむこか ● お庭づくり ● 遠めがね ● 掃除大名 ● ぶ
どう棚 ● 二百石返上 ● 附子 ● 親方日の丸 ● 名刀正宗 ● 一発屋 ● う
ずら ● にわか成金 ● 誕生祝い ● キセル ● 新ござ ● 綱館 ● かたみの
火吹き竹 ● 饅頭庖丁 ● 助太刀 ● 武士の妻 ● さし売り ● さそくの早
わざ ● 追剥がれ ● 浪人こじき ● 長屋の浪人(一) ● 長屋の浪人(二)
● 浪人こたつ ● 大石

ウソつきとホラふき

カマトトのはじまり ● 上方みやげ話 ● ひらめ ● 大太刀 ● 新案風退
治 ● 諸行無常 ● 集団強盗 ● 開帳 ● 千手観音 ● 風鳥 ● まちがい ● 雨
ふりの本屋 ● 調子にのる ● 栗のいが ● イノシシの角 ● 大力 ● 寒国

(一) ●寒国 (二) ●お国自慢 ●恐れながら、バア ●くそと思え ●くじらの絵 ●くじら汁 ●雪隠のお祭り

医者と坊主と儒者

医者のさじ (一) ●医者のさじ (二) ●上には上 ●えんまの医者 ●うにの角 ●無筆医者 ●病気になる薬 ●目玉医者 ●びいどろや ●役徳 ●はやり医者 ●口コミ ●代脈 ●能書 ●山の芋が … ●還俗 ●二本楊枝 ●貞髪 ●掛けとりの被い ●小便娘 ●一辺倒 ●遠矢 ●昼寝の夢 ●昼寝の枕

息子と娘

江戸がちぢむ ●ばか息子 ●万八 ●親父整理法 ●水平思考 ●嫁の乳

浅草と両国

●三角のこたつ ●神子の舞 ●おや痔 ●商売熱心 ●香々と孝行 ●へ
らず口 ●すねかじり ●油之通 ●のら息子 ●朝帰り ●いけんの鐘 ●
煙草ののみくらべ ●十文字 ●老萊子 ●相手のない恋 ●相手のある
恋 ●二人聲 ●一生独身論 ●ほんもののお多福 ●伊勢物語 ●ふだん
猫 ●娘と犬

塔のふた ●ばからしい ●たが屋 ●もみのき ●げび大尽 ●ふられ
侍 ●夜のあけぬ客 ●いつづけ ●嘘の復習 ●提灯の蠟燭 ●おならの
秘伝 ●冬の行灯 ●大文字 ●金魚 ●野宿の枕 ●新宿(一) ●新宿(二)
●品川(一) ●品川(二) ●深川 ●芝居見物 ●常かみしも ●ケガ見舞
い ●下まわり ●ネコも杓子も ●山出し下女 ●相撲無料入場法 ●釈
迦が嶺 ●壬生のただ見ねえ ●夜講釈 ●日本一親孝行

泥棒とこじき

まずヤカンから●盗人の屁●天涯無一物●二本ざし●釜盗人●泥棒どっこ●新無間●四海波盗人●半鐘泥棒●四面楚歌●初心の追剥ぎ●泥棒二世●こじきのファッショ●これへ一文●人にはい
うな

ケチンボと金

もう死なぬ●あまのじゃく●親子ケチ●死んでもケチ●虎の皮●桐の葉通信●ケチくらべ●茶うすと梯子●蓼●お先たばこ●通らぬきせる●みかん●拾った手紙●五郎八茶碗●菊づくり●柏餅の木●金の色紙●柿のタネ●親類の不幸●指仙人●ゴキゲン●金の拾い心地●無間の茶碗●ケチな身なげ●銭がほしい●かけとり

諸芸・諸職

(一) ● かけとり (二) ● かけとり (三) ● かけとり (四) ● かけとり
(五) ● 恵方まいり ● 苦しゅうない ● そうはいかぬ ● 銅の鳥居 ● う
ちでの小槌 ● おれもなりたい ● つれづれ草 ● 髪も酒となる ● つく
り酒 ● 拝領もの ● 干物の頭 ● ほうろく ● 鍵はこっち ● むだ ● 強盗
借金

鷲の絵 ● 百韻一卷 ● からしかき ● 出入口 ● 太平楽 ● 長い犬 ● 聞香
● 常念仏 ● 庭の配達 ● さしみ庖丁 ● インスタント井戸 ● マスプロ
井戸 ● 安い傘 ● 頭はだれのもの ● 竹の垂木 ● 夏はどうする ● 真剣
勝負 ● 馬の小便 ● 客はこやし ● 洞穴の熊 ● 首くくり料 ● 鴨 ● し
ったあと ● 身なげ番 ● 貸家札 ● めでたくさせぬ ● 辛抱者 ● 信濃者
● 三人前 ● 気転の丁稚

つんば親父 ● あたま帳 ● 雪隠さがし ● くだびれ馬 ● 営業妨害 ● 焼
 けのこり ● 福祿寿 ● 青い行灯 ● 司という字 ● かつおの初ね ● 符牒
 ● 百万遍 ● ばかはおれ ● 飢えたそばや ● 矢数 ● 駕籠かきの刺身 ●
 せわしない男 ● 三日印籠 ● 浪人鐔屋 ● 亭主の証拠 ● 葬式はあしだ
 ● 破れない鍋 ● 羽織と脇差 ● 釜前の三助 ● 今日休 ● 火と水 ● 厄は
 らい ● 声の薬 ● 夕立売り ● 看板

かよい小町 ● 忠臣蔵 (一) ● 忠臣蔵 (二) ● 因縁 ● あずき餅 ● 看病
 ● 貧乏幽霊 ● 名人チヨボ一 ● 親知らず ● 年号入りの重石 ● 金がほ

しい●井戸水●夜道の心がけ●竹箒●鯉の滝のぼり●すかし尻●
親の命日●節分●たばこ●富士山(一)●富士山(二)●常世の牛●
底なし茶釜●泳ぎの名人●かみそり●大きい足袋●屋提灯●銀さ
せる●新宅●重箱のふた●まちがいだらけ●精進の壺やき●貸し
た羽織●長口上●造反恐妻家●女の評判●うぬぼれそば●ネコの
声色●猫足●落馬●自鬢●スピード競争●御即位●島台●弁天と
スッポン●百足の草鞋●遠いか近いか●春の日●月蝕●仇討●寒
氷●白壁●うわばみ養成●公家のながれ●蟻●一つフトン●紅毛
の紅毛しらず●大黒の釣り●おうむ

現代人の笑いと江戸小咄

大名と武士



江戸は武士の町。「ありもせぬいくさを請けおうて」無為徒食する大名と武士が、人口の半数を占め、この膨大な消費人口によって江戸は繁栄した。小咄本でも、江戸在住の大名と武士を扱ったものが、量的にいちばん多い。

江戸の市民は武家に依って生活しながら、貯えた経済力で生活を愉しんだ。この時代ほど、都市の市民が人生をアソビと考え、アソビに徹した時代はない。市民のアソビの人生が最頂点に達したのが、明和・安永のころであろう。幕藩体制はすでに崩壊期に入り、武士の生活はラクではなく、市民なみに生活を享樂できたのは、浪費を美徳としたような大名と上層武士に限られていたようである。

なかには自嘲的に町人化した武士も少なくない。天明の狂歌や洒落本、黄表紙のたぐいも、おおむね町人化したインテリ武士の手になっている。市民が吉原や芝居で享樂したアソビを、彼らは文字の上で遊んだといってよい。江戸文学が一〇〇パーセント遊戯文学とよばれるゆえんで、小咄もその一つだった。

江戸小咄では、武士が武士らしくしかつめらしいほど笑われ、諷刺の効果をあげる。とくに浪人に対する嘲笑的態度は、痛烈である。いずれも小咄の庶民的発想の現われにほかならない。ただ大名や上層武家の内情は、庶民のうかがい知るところではなかったらしく、「こうもあるうか」程度の想像的な面が強いが、想像のしかたにおのずから庶民の辛辣な批判がはたらい

いるのが、興味ふかい。

小咄に扱われた江戸在住の武士は大体三種に分類できる。

旗本——徳川家直参（直属の家来）で一万石以下百石までをいい、江戸周辺に知行所（領地）をもち、將軍にお目見得を許された。お目見得以下は御家人で、土地の代わりに俸禄をうけた。千石以上の旗本は大身といい、三千石以上になると大名なみの支配機構をもった。旗本は幕政の中枢に参列し、幕府軍事力の中核でもあったから、百石以上を「殿様」とよんだが、小咄では大名と混同されやすい。庶民と直接口をきく「殿様」なら、まず旗本と思ってよい。

新五左——諸国大小名の家来をすべて藩中とよび、これに定府と国侍があった。定府は代々江戸づめで、藩主が参勤交代で国もとへ帰っても奥方とともに江戸に残る。これに対して藩主の供をして江戸へ上下する国侍を勤番者といい、「新五左」とか「浅葱裏」の侮称で、江戸っ子から田舎者あつかいされた。

浪人——一芸一能ある者は主勤めをやめて、町道場を開いたり手習いの師匠になり、独立してかえって収入のふえる者もいたが、多くは裏長屋に住みながら町人に同化しきれない無能の失業武士で、わずかな手内職で口を糊し、こじき同然の者もいた。

インフレ

桃太郎鬼ヶ島に味をしめ、こんどは龍宮へ行ってみようと、出かける途中サルにあう。

「桃太郎さん、どこへござる」

「龍宮へ宝をとりに来いる」

「お腰につけたはなんでござる」

「日本一のきびダンゴ」

「一つ下さい、おもしろよう」

桃太郎ダンゴをとり出してサルにやれば、

サルつくづくとながめて、

「モシ、小さくなりやしたね」

（聞上手）

江戸小咄本のトップをきった明和九年板

「鹿の子餅」の、開巻第一に出てくるのがこれ。ただしここにのせたのは、「鹿の子餅」の好評に便乗して出版された「聞上手」掲載の二番煎じだが、前者より簡潔になっている。

前者のオチは、

サル浮かぬ顔で、「こいつうまくないやつだ」となっていて、「日本一のきびダンゴ」といったってたいしてうまくもなかったんだ、というサルの自嘲で、お伽話の現実暴露ともとれるが、「うまくない」のも「小さくなった」のも、当時のインフレ世相への批判とみたほうがよい。

江戸中期以後の慢性インフレは、六回にわたる貨幣改鑄の結果で、幕藩体制崩壊の引き綱になった。